

## 世界のエンジニア資格情報 02 ~ 韓国編 ~

青葉 堯

社団法人日本工業技術振興協会

### 1. 韓国のエンジニアの地位

韓国では、国家資格法を制定している。そこでは、学者階級、技術者階級、技能者階級を区分し、それぞれの最高資格を、博士、技術士、技能士(実際は別の名称)としている。これは実にわかりやすい説明である。韓国だけでなく、中国も、また、欧州や米国(以下諸外国)も、同じような考えと思う。

諸外国の社会は、基本的に階級制度で成り立っている(日本にはない)。階級と言えば家柄であるが、家柄不足でも学歴で、学歴不足でも資格で、資格不足でも資金(高額)で、階級に参入可能である。

諸外国の階級制度はきわめて厳格で、その階級に参入可能な家柄・学歴・資格・資金の何れかがない限り、階級を変わることができない。例えば、技能者が技術者になるには、あらためて学校に行かなければならない。米国にはそのような学校がある。

韓国に限らず、世界のエンジニア資格は階級(クラス)である。ただし、この世界のエンジニア情報では、家柄や資金は議論の対象外にしている。ここでは学歴が非常に重要で、学歴がないと取得できない資格もある。例えば、ABET 認定の工学系学士でないと、米国 PE の第一次試験を受験できない。JABEE 認定の工学系学士が、日本技術士の第一次試験を免除されるのと、似ているが、思想が根本的に違う。

韓国では、学校が階級を作っている。韓国では大学入学試験が国家的な行事になっている。学者階級と技術者階級は学校に行かなければならない。技能者階級は学校に行かなくてもなれる。ここで、階級差が決定的になる。韓国では、会社も階級制度(職員階級と工員階級)になっている。一流会社の職員階級の入社試験願書には、TOEIC900点以上の証明書を添付する。

韓国古来の伝統では、手に汗をして働く者は、下層階級とされているそうである。従って、エンジニアそのものの地位が低く、エンジニアの中では、ものづくりに遠い学者階級が高く、技術者階級が中位、ものづくりに近い技能者階級が低くなることになる。わかりやすく言うと、博士が上位、技術士が中位、技能士が下位である。これは韓国だからではない。日本以外の世界中でそうなっている。

### 2. 日本のエンジニアとの比較

韓国の工学教育は、欧米と同様(中国も同じ)、基礎科学に重点を置いている。諸外国の技術は、

「技術者の能力」にあり、従って、技術者の基礎教育が非常に重視される。韓国社会には(諸外国も同じ)厳格な階級社会があり、階級の低い、ものづくりの教育が重視されないのは、当然のことである。

これに対し、日本の工学教育は、ものづくりに重点を置いていることはよく知られた事実である。日本だけは、世界で多分唯一であるが、事実上階級がない。日本では、技術と技能は同じ意味を持つ言葉で、学者においても、学問と技術が一体化している。日本では、具体的に目に見えてわかりやすい、ものづくりの教育が重視されたのも、また、当然のことである。

日本の技術は、「故障しない製品」にあり、製品が良ければ、それで十分で、技術者の能力が表面に出ることは希である。ここが諸外国(とくに欧州や米国)とは根本的に違っている。繰り返しになるが、諸外国の技術は、「技術者の能力」にあるのに対し、日本の技術は、「故障しない製品」にある。

お客(例えば自動車に乗る人)のためには、作る側の技術者の能力を評価するよりも、製品(故障しない自動車)を評価した方が良いに決まっていると、多くの日本人は思うのであるが、諸外国ではそうはいかないようである。諸外国では、階級が低いかもしれないお客よりも、階級の高い技術者を尊重するという根本思想があるのだろうと思う。

諸外国で、日本の製品は、とくに階級の低い人たち(人数が多い)に信頼されている。日本には事実上階級はなく、従って、日本の産業界では、学校教育には、知力・体力・忍耐力(ものづくりに必要な忍耐力)の育成を期待し、「技術者の能力」育成は、企業の内部で行う、という考えが非常に強い。教育は20年たってわかる結果論であるから、日本の教育は「故障しない製品」で、世界の高い評価を得たという結果で、成功したと言える。

日本が、貧乏国(アジア辺境の貧困弱小国)から、非常に短い年月で、富裕国(世界の富を事実上独占する一角を占める)に至ったのは、人類の歴史における奇跡である。その奇跡は、日本製品に「当たり外れがない」(故障しない)ことでおきたことは明らかである。日本のものづくりの技術は、基礎科学由来の創造的能力(とくに欧州や米国が得意)よりも、「次の工程に良品だけを送る」というような、細かいところに気が付く実務的技能能力と責任感(日本の教育の成果)がポイントである。

国際化の議論では、従来は日本の技術者が外国に認められるにはどうするかという話が多かったのであるが、今では、外国の技術者をどのように日本が認めるかという話になっている。なぜなら、日本の技術者は、実力は世界最高、給料もまた世界最高であるから、事実上、外国で働く者がいなくなったからである(日本資金や日本企業の仕事、また、短期の出張を除く)。外国で日本の技術者資格を認めてもらったとしても、利用する機会が殆どない。

日本の技術関連の企業や個人が、日本国内で仕事がなくなったとしても、外国に出稼ぎに行くことはまずないであろう。優れた技術を持つ企業あるいは個人は、日本国内で別の仕事に進む能力を持っている。それできない企業や個人は、日本の技術レベルに遅れてしまったとみなされ、どこに行っても役には立たない。

さて、今後は別の問題もおきている。国家は、外国の侵略から民族を守る究極の組織だということを理由に、これからの日本国は、技術者の資格問題も、国防問題として、国際化に対抗することはあると思う。経済問題より優先される問題で、あれほど「技術導入」「外資導入」と言っていた日本が、「技術防衛」「資本防衛」と言うようになるとは、夢にも思わなかったことである。

韓国では、日本との技術者資格の相互承認を望み、長年にわたり努力を重ねてきたが、いつの間にか、日本の国防の壁が高くなり、むしろ困難さが増している。